

おわりに

各事例の成果や課題から、次のような指導が授業改善の方策として有効であったことが分かる。生徒の実態に合わせて、各事例をアレンジしたり考え方を参考にしたりして御活用いただければ幸いです。

1 生徒同士が「学び合い」を通して能力を高め合う

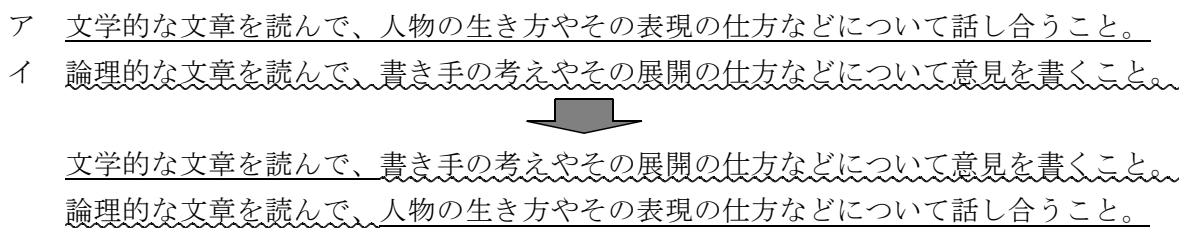
教師は教えるべきことは教えなければならない。しかし、情報を一方的に与えただけでは生徒の生きた力にならないこともある。生徒同士で教え合ったり説明し合ったりすると、「分からない」ことが「何となく分かる」ようになったり、「よく分かる」ようになったりして、理解が深まることもある。教え過ぎは、時に生徒の受け身の学習態度を助長する弊害もある。主体的な学習態度の育成のために、また「腑に落ちた」理解や、人に説明できるレベルでの理解をさせるためにも、生徒同士が学び合う場を効果的に指導の中に取り入れたい。**事例1**では小論文の相互評価に、また、**事例3**では調べ学習に、それぞれグループ学習を取り入れ、「学び合い」を通して指導の成果を上げた。

ただし、指導者も生徒もグループ学習に不慣れな状況で、ある日突然指導法を変更しても意図どおりに指導が展開しないこともあろう。生徒のコミュニケーション能力が十分に育成されていない場合はなおさらである。日頃の指導にペア学習を取り入れたり、ソーシャルスキルトレーニングや構成的グループエンカウンター等の指導法を援用したりして、学習集団として有効に機能する、生徒の人間関係づくりに努めておくことも大切である。

2 当該科目の言語活動例だけでなく、他の科目の言語活動例も取り入れる

学習指導要領に示された言語活動例は、あくまでも例である。したがって、例えば「国語総合」の指導であっても、「古典B」の言語活動例を参考にして取り入れてよい。その逆もまた然りである。実際に**事例2**は、「古典B」を想定した指導事例であるが、「国語総合」の言語活動例を参考にしたものである。

また、次のように、二つの言語活動例の部分を組み合わせることで活動を再構成して実践してもよい。



3 学習のねらいを具体的に示す

生徒にとって、国語は勉強の仕方がよく分からない教科の一つになっている。そのような現状を改善するためには、学び甲斐のある教材を提示するとともに、学習のねらいを具体的に指導して、能力の向上の実感を伴う指導をすることが大切である。

事例1では小論文の相互評価に、「ほめてあげたい点」と「改善へのアドバイス」という二つの観点を示して、評価しながら読ませた。**事例3**では、兼好法師好みの和歌を「八代集」の「春」の部から探すという活動にポイントを絞って、学習に取り組みさせた。生徒は割り当てられた和歌集を、「兼好好みであるか否か」という判断基準に従って、一首一首を評価しながら読んだ。これらの評

価値読みは、PISA調査からその必要性が指摘されるクリティカル・リーディングの方法の一つでもあり、日本の児童生徒に求められている読む能力の一つでもある。

4 自己評価や相互評価を学習活動に取り入れて、評価能力を育成する

自己評価や相互評価を文章の推敲に効果的に生かすために、評価能力の育成を視野に入れた指導を日頃から心がけることが大切である。そのために、曖昧な指摘や指摘漏れができるだけないように指導することや、アドバイスをもらう立場を考えて、どのようなアドバイスをもらえば推敲に生かしやすいかを考えさせることも必要である。

事例1のような実践を今後の指導に生かす際には、生徒の学習状況に応じて、次のような点について留意するとよいだろう。

- ①「よい点」「改善点」を指摘させる際に、「どこが」、「どのように」なのか分かるように、具体的に書くように指導する。
- ②指導事項に沿った評価のポイントを具体的に示して、それに従って評価させる。評価項目をチェックリストとして配布して評価させる。

5 読み比べの可能性を広げ、教材を発掘する

従来、読み比べの指導に使用された教材の多くは、二次的に創作された作品と、原典・原作を比べるという方法が一般に知られたものであった。しかし、視点の当て方次第では、教材開発の余地が大いに残されている。

事例3では、「徒然草」に対して「八代集」を読み比べ教材として用い、兼好好みの和歌を「春」の部から見つけさせた。その他に、「春」以外の部から探す方法や、「月」や「雪」について探すというような方法も考えられる。日本人の美意識について学ぶ方法としても応用できそうである。

6 古典を現代に通じるものとして読ませ、古典を学ぶ意義を実感させる

古典を読む能力を養うことは、生徒の「ものの見方、感じ方、考え方を広くすること」や、古典に親しんで人生を豊かにする態度を育成することにつながる。そのような古典を学ぶ意義を生徒に実感させるために、古典と現代との接点や共通点について、認識させることが必要である。

事例2では、漢文の寓話の内容と自分の生活や現代の状況との共通点を考え、自分の言葉で物語を創作するという学習活動によって、古典を現代に通じるものとしてとらえさせている。

7 学校図書館や図書資料を活用する

学習の場は通常の教室に限らず、学校図書館を活用することも大切である。学校図書館の図書資料も学習活動に大いに取り入れたい。

事例3では、「国語総合」の随筆の学習に「八代集」を取り入れ、兼好法師好みの和歌を探すという目的を示して、それを調べるために図書を活用した。このように、図書を読むためだけでなく、調べ学習のためにも活用することも大切である。なお、近隣の県立高校や公立図書館との連携を計画的に図り、十分な冊数を準備しておけば、学習活動をより効果的に展開することができよう。